

令和3年度 特別選抜コース

第1回 入学試験問題 (2月1日 午前)

国語 (50分)

注意

- 1 この問題用紙は、試験開始の合図で開くこと。
- 2 問題用紙および解答用紙に受験番号・氏名を記入すること。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入すること。
- 4 字数制限のある場合は、特別な指示がない限り、すべて句読点や「」「」などの記号を含んだ字数として解答すること。
- 5 印刷がわからない場合は申し出ること。
- 6 試験終了の合図でやめること。

東京都立大学等々力中学校

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□ 次の——線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直して答えなさい。

- 1、先人の功績を礼賛する。
- 2、けがの功名。
- 3、有名武将の石高を比べる。
- 4、矢面に立つ。
- 5、愛好者の集いに参加する。
- 6、荷物をカシヤに積む。
- 7、トトウを組んで立ち向かう。
- 8、カンソな式典にする。
- 9、美しいピアノのシラベに耳を傾ける。
- 10、ハチクの勢いで勝ち進む。

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「なあ、いいか。勘ちがいするなよ。これはお情けでも何でもないぞ。勝ちをあきらめたからお前を出すんじゃない。追いつきたいからお前を出すんだ。貴臣と交代でな」

「え、貴臣なんですか？ 交代」

「そうだ。貴臣と交代で大地が出る。貴臣もそのつもりでいる。だから初めからあんなに飛ばしたんだ。あいつが倒れる前に、早くアップしろ」  
「ほら、大地、アップ！」と真乃が再び急かす。

ぼくはスパイクのヒモを結び直し、ベンチの後方へまわる。屈伸、伸脚をやり、短い距離のダッシュをくり返す。緊張してる余裕もない。伯母さんと田崎さんに目をやる余裕もない。

アップがすむと、ボールがピッチの外に出るのを待って、五十嵐が主審に声をかけた。

「10番アウト！ 13番イン！」

駆け戻ってきた貴臣と、パチンと手を合わせる。

「頼みます！ 勝てますよ、ウチら」

貴臣にそう言われ、いや、頼まれても、と言いそうになるが、そこはこらえて言う。

「ういっす」

そしてピッチに駆けこんだ。

タッチラインをまたいだけで、見え方が変わる。風景が変わる。敵味方合わせたほかの二十一人が同じ平面に立っていることを実感する。とてもじゃないが、森は見れない。慣れてないぼくは、一本の木さえ、見れないかもしれない。

スローインでプレーが再開され、ぼくは①やみくもに駆けまわる。システムの変更はない。ぼくが入るのは、そのまま貴臣のポジションだ。

あのうまい10番に代わって入ったのだからそこそこやるだろうと思ったのか、ぼくにマークがつく。相手のボランチだ。あ、それ、必要ないですよ、と言ってやりたくなる。まあ、②言わなくてもわかるだろう。残り七、八分でも。

悟から二度バスがきて、二度ともボランチにとられた。バスをカットされたのではない。ぼくが持ったボールを、とられたのだ。

でも悟が懲りずにくれた三度めのパスは、ダイレクトで修介にはたくことができた。それがたまたまいいパスになり、修介はシュートを打った。が、ボールはキーパーにキャッチされる。

「ナイスパス、大地！」と修介に言われる。

後輩からの呼び捨てが何とも心地いい。

「大地〜！」という声が、ピッチ外から聞こえてきた。

女声。若くない。真乃や桃子や未来ではない。

A 伯母さんだろう。

伯母さんのそこまでの大声は、初めて聞く。さすがは姉妹。声も似てるよ、母と。

宮島と田崎。どっちでもいい。

ぼくはこの先も、③伯母さんの甥っ子息子でいたい。

B っ、そう思う。

伯母さんと、そして伯母さんが好きになった田崎さんと、一緒に暮らしたい。

C っ、父の店にイタリア料理を食べに行きたい。そのときは、一人じゃなく、伯母さんと二人で行きたい。田崎さんと三人でもいい。

その代わり、父にも母の墓参りに行ってほしい。別れた妻のそれをするのはどうも、と言うなら、ぼくの母の④それとして、行ってほしい。試合に出慣れてないから、時間の経過がわからない。残り一分か二分か。それとも、Dアデイシヨナルタイム（注）に入ってるのか。入ってるなら、アデイシヨナルタイム何分とベンチから、また主審からも声がかかるだろう。

悟が相手センターバックに倒される。哲から縦パスを受けたところを。ペナルティエリアのすぐ外で。

主審の笛が鳴り、みつば高にフリーキックが与えられる。

よしっ。直接決めちゃえ、悟。

と思ってたら。

その悟に言われた。

「直接決めちゃえ、大地」

「え？」

「ここからなら大地だ。ほら」とボールを渡される。

ここ。左四十五度。デルピエロ・ゾーン。

「いや、あの、でも」

「行こうぜ、大地！ 入れちゃえ！」と背後から言われる。

尚人だ。

「見せてくれよ、大地」と哲。

「練習どおり打ちや入るって」と敬吾。

モタモタしてる時間はない。自分でボールをセットする。落ちつけ、大地。助走の距離をとる。マジで落ちつけ、大地。

警戒した相手が壁をつくる。その数、五枚。無理もない。向こうにしてみれば、ここで振りだしに戻されるわけにはいかない。

「近い近い」と主審に注意され、五枚の壁が二歩後ろに下がる。

それでも、壁はかなり高い。デカイディフェンダーにデカイフォワードまで加わるから、五枚すべてが高い。

キーパーは、逆に見づらいだろう。

ぼくにもシュートコースは見えない。一番右の壁の頭を越えて、落とす。それしかない。

で、ぼくはストーンと落ちるボールを蹴キれるのか？

蹴れない。

ぼくにできるのは、慎重にコースを狙うことだけだ。

ただ。思いどおりに蹴れば、入るかもしれない。

「大地、狙え！」「決める、大地！」「頼むぞ、大地！」「大地！」

助走を開始する。

ぼくがこれを外したところでみんなが文句を言わないのはわかってる。でも決めたい。

相手が警戒してる。そのことがわかる。向こうはたぶん、ぼくをフリーキックの名手だと思ってる。この時間に出てくるんだからスーパーサブだと思ってる。周りのみんながかけてくれた声を聞いて、ぼくが直接ゴールを狙ってくると、そう思いこんでる。

ゴールを決めたい。ぼく自身が決めなくてもいい。チームとして、決めたい。一パーセントでも確率が高いほかの選択肢があるなら、ぼくはそちらを選ぶ。⑤ それこそがぼくだ。

郷太が素早く動き、マークを外すのが見える。ゴールを狙わず、ぼくは郷太が走りこむ先にボールを蹴る。走りこむ郷太の頭に合わせる。そこへなら、確実に蹴れる。自信がある。

相手してみれば予想外のところへボールが飛ぶ。ゴールには向かわない。でもふわりと浮かんたそのボールが落下する先に郷太がいる。

郷太はフリーでヘディングシュートを打つ。

どんぴしゃり。

そのボールは、ゴールポストに当たる。当たり、ゴールの内側じゃなく、外側へとはじかれる。

うわああ、と大きな声があちこちで上がる。ピッチ内でもピッチ外でも上がる。

「まだまだ。まだ時間はあるぞ！」と尚人が言い、みんなが自陣に駆け戻る。

「大地、悪い。ボール、スゲえよかったのに」と郷太が言う。

「惜しかったよ。もうちよいだった」と返す。

本当に、惜しかった。しかたない。今日の郷太は、貴臣と同じぐらい走りまわってた。守備のしすぎで疲れてたのだ。

このままいけば、⑥ 部活は終わる。 残りの数分で、まさかの同点、そして奇跡の逆転、なんてことがあれば、まだ続く。

終わるにしても、続くにしても。

⑦ このあと。

一緒に帰ろうよ、と真乃を誘ってみよう。誘われるのを待つんじゃない、自分から誘ってみよう。キューピッドなんだから、自分で何とかしよう。全裸に白い羽で、矢を放とう。

ピッチを走りながら、ぼくはふとベンチを見る。貴臣は立って試合を観てるので、<sup>⑧</sup>さっきまでぼくが座ってたところは空いてる。二年と四カ月。ずっと補欠だったけど。楽しかったなあ。部活。

いやいや。まだそんなこと言っちゃいけない。前に伯母さんも言ってた。

負けは、実際に負けたときに認めればいいのだ。

あと数分。勝つよ、ぼくらは。

(小野寺 史宜「ホケツ！」より)

(注1) 「ボランチ」………試合の流れをコントロールする舵取りかじの選手のこと。

(注2) 「アディショナルタイム」………中断された分の時間を試合時間に追加するルール。

問 一、——線①「やみくもに」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、歯を食いしばり無理をして
- イ、先の見通しもなくむやみに
- ウ、相手との駆け引きに夢中で
- エ、目的だけを念頭にむやみに

問 二、——線②「言わなくてもわかるだろう」とありますが、どのようなことが「わかる」のですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、試合をひっくり返せるようなサッカーの実力を持った、スーパースブであるということ。
- イ、重要な場面で試合には出てきたものの、試合の流れを左右できるようなサッカーの実力はないということ。
- ウ、試合終了間際に監督のお情けで出してもらった、サッカー技術は著しく劣る選手であるということ。
- エ、あのうまい10番に勝るとも劣らない秘密兵器のような選手であるということ。

問 三、

A
---

、

D
---

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- |          |         |         |         |
|----------|---------|---------|---------|
| ア、A—たぶん  | B—いきなり  | C—たまには  | D—はつきりと |
| イ、A—きつと  | B—きつぱりと | C—はつきりと | D—たぶん   |
| ウ、A—たぶん  | B—はつきりと | C—たまには  | D—もう    |
| エ、A—おそらく | B—たまには  | C—たぶん   | D—はつきりと |

問 四、——線③「伯母さんの甥っ子息子でいたい」とありますが、これはどのようなことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、実際には伯母さんであるが、「ぼく」にとっては母親に抱くのと同じ感情を持っている存在であるということ。
- イ、母親代わりに「ぼく」を育ててくれた大切な存在だが、伯母と甥という関係は崩したくないということ。
- ウ、伯母さんは「ぼく」に甥っ子としての立場を強いるが、「ぼく」は伯母さんの息子でありたいということ。
- エ、実際には伯母さんでしかないのに、母親のようにふるまうことを疎ましく思うのを反省しているということ。

問 五、——線④「それ」は何をさしていますか。文章中から一語で探し、抜き出して答えなさい。

問六、——線⑤「それこそがぼくだ」とありますが、「ぼく」は自分のことをどんな選手だと思っていますか。それを説明した次の文の空欄にははまる言葉を指定された字数で考えて答えなさい。ただし、1には「自分」、2には「可能性」という言葉を使うこと。

1、七字程度

2、十五字程度

選手であるということ。

問七、——線⑥「部活」とありますが、この熟語と同じ成り立ちのものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア、読書

イ、高校

ウ、青空

エ、入試

オ、売買

問八、——線⑦「このあと」とありますが、この言葉の後にはどのような内容が補えると考えられますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、これまでのぼくをひたすら反省しよう。

イ、これまで通りのぼくを変えずにいこう。

ウ、これまでの人との距離感を大事にいこう。

エ、これまでのぼくよりも少しでも成長しよう。

問九、——線⑧「さつきまでぼくが座ってたところは空いてる」とありますが、この表現は何を象徴していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、自分は唯一の存在であり、これまで自分が過ごしてきた時間は終わったのだということ。

イ、自分が唯一の存在であり、自分のようなみじめで悲しい存在は二度と現れることもないということ。

ウ、「空いてる」ということは、自分が過ごしてきた二年四カ月の時間が空虚であったということ。

エ、「空いてる」ということは、次に自分と同じ思いをする人が現れる準備が出来たということ。



問 十、この文章の特徴として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、短文をたたみかけることで、緊迫感や臨場感が読者に伝わる形式になっている。
- イ、「ぼく」が語り手になっていることで、「ぼく」の心情の変化が読者に伝わる形式になっている。
- ウ、会話を多用することで、チームメイトの大地に対する思いが描かれる形式になっている。
- エ、サッカーの専門用語を多用することで、読者をサッカーファンに限定する形式になっている。

### 三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

脳の研究を続けていると、既存きぜんの常識を覆くつがえすような意外な事実がつきつぎに発見されます。最先端の現場で真実を知る驚き、真実を追究する高揚感こうようかん——これは脳科学の醍醐味だいごみです。一度でも脳研究の快感を味わうと、もうやめられなくなります。そんなワクワク感をみなさんにもぜひ味わってほしいと思います。

ところで脳科学者である私がよく受ける質問が三つあります。一つ目は「<sup>①</sup>なぜ脳の研究を薬学部でやっているのですか」です。私は東京大学の薬学部で研究をしています。一般には「薬学部」というと、薬だけを専門にする学問だと思われるのかもしれませんが。しかし、薬をつくるためには、当然ですが、体の仕組みを知らねばなりません。体のどんな仕組みにどんな異常が起こると病気になるかがわかれば、よりよい薬をつくることができます。

私の場合は将来、脳の病気、とりわけ老人ボケなどの認知症ちゅうじょう（痴呆疾患ちほうしつかん）を治療する薬をつくることを目指しています。しかし現状では脳の仕組みはあまり解明されていません。薬を開発するためには、まず脳を知り、脳をきわめることが肝心です。そのようなわけで私は薬学部で脳の研究をしています。

脳研究は、医学部や理学部や工学部など、さまざまな分野で行なわれています。似たような脳研究が異なった学部で並行して行なわれているケースもよくありますが、巨視的な意味では「A」が異なっていることが多いのではないのでしょうか。医学部では病気の治療を目的にしている研究者もいるでしょうし、理学部では純粹に脳のことがもつと知りたいから研究をしている人もいます。工学部ではロボットや人工知能をつくるために脳を研究している人もいます。脳研究はどの学部でも行なうことができますが、自分が何をしたいのかという目的が、学部を選ぶポイントになると思います。

次によく聞かれる質問は「将来、脳の研究をするためには、学生のとときにはどんな勉強をしたらよいのでしょうか」です。脳研究に限らないと思うのですが、もし<sup>②</sup>何かの専門職に就きたいのならば、就職前はあえてその専門以外の勉強をすることを薦すすめます。

専門のことはその分野を専攻したらいざれ勉強しなければなりませんし、専門のコースに入ったら、それこそ専門外の分野を勉強する機会はあるので減ひくってしまうことでしょう。それならば、脳の勉強をしなくてもよい今のうちにさまざまな分野に目を広げておくことが重要ではないでしょうか。

研究者には専門領域を超えた幅広い知識や考え方が必須ひつずです。だれでも思いつくような安易なアイデアのみでは大発見にはなかなか恵まれないうでしょう。個性あふれるアイデアは、やはりその人がどれほど多様な分野に精通しているかにかかっていると思います。

三つ目の質問は「どうしたらすばらしい発見ができるのか」です。残念ながらこればかりは私にもわかりません。もしわかったのならば、私も

もつと楽に業績があげられるはずですよ。ただ、助言できることはありません。それは「問題意識」です。

薬学部で私が配属された当時、研究室を統括とうかくされていた齋藤洋教授は、嘔吐おうとの研究で国際的な知名度を誇っていました。理由は「嘔吐する小型動物」を発見したからです。この意味がわかるでしょうか。これはとても **B** なことだったのです。

ヒトは乗り物酔いや食中毒などではしばしば吐きます。ペットを飼っていた人ならば知っていると思いますが、イヌやネコもまたヒトと同じように吐きます。一方、研究者がよく使う実験動物であるネズミやウサギはけっして吐きません。吐くための脳回路が備わっていないからです。要するに、「制吐薬せいとやく」や「吐き気止め薬」の研究にはラットやマウスが使えないわけです。そこで嘔吐の研究にはイヌやネコ（ときにはヒト）を実験台として使わなければなりません。これはデメリットです。イヌやネコはネズミよりも大型の動物ですから大規模な飼育施設が必要ですし、そもそも一日に何匹（何人）も検査することができません。また効能を調べたい試薬や薬物も、多くの量が必要になります。 **C**、嘔吐の研究の現場では「小型で嘔吐する動物」が必要とされていたのです。

そんな中、齋藤教授は当時、「スunks」とよばれる体長一五センチメートルほどの小型の動物（南日本から台湾にかけて生息するモグラの一種）を用いての肝臓かんぞうの研究をしていました。 **A** ある日教授は、肝硬変かんこうへんがいかに生じるのかを調べるために、スunksにアルコールを投与しました。 **I**するとスunksが吐いたのです。 **③** 驚いた教授は周囲に「スunksは吐くぞ！」と興奮しながら言いました。すると周囲の人々は「何を今さら」と言った表情で「そりゃ、そうですよ」と平然と答えたそうです。 **U**

このとき齋藤教授と周囲の研究者の違いはなんだったのでしょうか。そうです。齋藤教授は「問題意識」をもっていたのです。 **E** 一方、周囲の研究者たちはこれまでも何度もスunksが嘔吐する様子を見てきたにもかかわらず、それが嘔吐研究にどれほど重要な意味があるのかを理解していなかったのです。その後、スunksが国際的な実験動物となって嘔吐研究に貢献したのは言うまでもありません。

「発見」とは単に「初めて見る」という意味ではありません。「ただ見る」だけでは発見ではありません。目の前で見えている事・実・の・重・要・性・に・気づいてこそ「発見」なのです。

重要性に気づくためには「問題意識」をもっていなければなりません。一体、自分は何を知りたいのか、世間が何を欲しているのか、何がまだ解明されていないのか、どんな事実がわかればその後どんな道が開けるのか。こうした問題意識をもっていなければ発見はありません。

その一方で、発見が「**④** 偶然」に支えられていることも多々あります。齋藤教授もスunksにアルコールを投与するという実験を偶然に行なったからこそ、大発見が訪れたのです。 **D**、この発見が「単なる偶然」ではなかったことは、 **⑤** 周囲の平凡な研究者が同じ事実を見ていたのに「発見」できなかったことが物語っています。

発見や発明のアイデアは神様が与えてくれるものではありません。むしろ、それまでにどれほど努力と勉強を重ねてきたかにかかっています。科学者はこれを「セレンディピティー (serendipity)」とよびます。思いがけない発見をする才能。単なる偶然ではなく、訪れた幸運を自分のもの

にできる能力。発見は周到に準備した者だけに訪れる——絶対に忘れてはならない研究者の戒めです。

(池谷裕二「薬の開発のために脳をきわめる」より)

問一、——線①「なぜ脳の研究を薬学部でやっているのですか」とありますが、その理由を「」だから。」に続くように文章中から二十五字以上三十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

問二、Aにあてはまる言葉を文章中から二字で探し、抜き出して答えなさい。

問三、——線②「何かの専門職に就きたいのならば、就職前はあえてその専門以外の勉強をすることを薦めます」とありますが、「専門以外の勉強をすることを薦め」るのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、専門の勉強をするよりも広く浅く一般教養を身に付ける方が、社会人として最優先される事項だから。
- イ、専門以外の勉強をしておかないと、社会常識をわきまえない非常識な人間になってしまうから。
- ウ、専門職に就いてしまうと自由に勉強する時間がなくなり、決められたルールの上を走るしかないから。
- エ、専門の研究で独創的なアイデアを生むには、色々な分野についてよく知ることが必要だから。

問四、Bにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、一般的
- イ、画期的
- ウ、表面的
- エ、幻想的

問五、C・Dにあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア、しかし
- イ、あるいは
- ウ、つまり
- エ、たとえば

問 六、——線③「驚いた教授は周囲に『スinksは吐くぞ!』と興奮しながら言いました」とありますが、教授が「興奮しながら言」った理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を文章中から指定された字数で探し、抜き出して答えなさい。

嘔吐の研究に最適な 五字 が吐くのを見たから。

問 七、——線④「偶然」の対義語を漢字二字で考えて答えなさい。

問 八、文章中には次の一文が抜けています。この文を入れるべき最も適当な箇所を文章中の ア ～ エ から選び、記号で答えなさい。

嘔吐の研究には今どんな問題があつて、何が望まれているのかを知っていたのです。

問 九、——線⑤「周囲の平凡な研究者が同じ事実を見ていたのに『発見』できなかった」とありますが、「周囲の平凡な研究者」が『発見』できなかった「のはなぜですか。その理由を「嘔吐研究に」という言葉に続けて四十字以内で答えなさい。ただし、「問題意識」・「事実の重要性」という言葉を使うこと。

④ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、文章中の①～⑥は形式段落の番号を示しています。

① ネアンデルタール人の脳は私たちの祖先と同じくらいの大きさだったようだ。身体はもつと頑丈でたくましかった。ともに生きていた時代もあったが、3万～4万年ほど前、彼らは地球上から姿を消してしまった。

② どうして絶滅したのか。専門家の間では諸説あるというが、筆者には不思議で仕方がない。強い者が弱者を力で倒すこの世界で、勝ち残るのはむしろ、彼らのほうではなかったのか。

③ 「じつは生命の歴史をみると、生き残ったのは強者ではなく、<sup>③</sup>変化に適応できる弱者のほうでした」。著書『生き物の死にざま』などで知られる静岡大学教授の稲垣栄洋さん(51)はそう教えてくれた。

④ 私たちはつねに未来を意識し、いまを生きている。それを可能にしたのは、弱さゆえに集団性を強め、その過程で仲間が何を考えているのかを「想像する」という力を得たこと。「想像は一人ひとりが異なります。その多様性が生き残りのカギとなったのでは」と稲垣さん。

⑤ 逆に言えば強い者はその強さのために変化を望まず、多様化しにくい。恐竜もネアンデルタール人も。「強い者が勝つのではない。勝った者が強いのだ」とは元サッカー西独代表ベッケンバウアーの言葉だ。

⑥ きょうは「進化の日」。160年前、進化論を唱えたダーウィンが「種の起源」を出版した日にちなむそうだ。環境の変化に適応できない生き物はいつかは淘汰<sup>注2</sup>されていく。人類も例外ではない。<sup>④</sup>その強くて弱き存在のあすを想像して、しばし謙虚な気持ちとなる。

(朝日新聞「天声人語」より)

(注1) 「西独」……旧西ドイツのこと。

(注2) 「淘汰」……生存競争の結果、環境に適応できないものが滅びること。

問 一、——線①「どうして絶滅したのか」とありますが、強い者が「絶滅した」理由が分かる一文を文章中から探し、最初の五字を抜き出して答えなさい。

問 二、——線②「彼ら」とは誰のことを指していますか。文章中から探し、抜き出して答えなさい。

問三、——線③「変化に適應できる弱者」とありますが、「弱者」が「変化に適應できる」ようになったのはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる部分を文章中から四十五字で探し、最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

四十五字

によって多様化したから。

問四、——線④「その強くて弱き存在のあすを想像して、しばし謙虚な気持ちとなる」とありますが、ここで筆者が言いたかったのはどのようなことですか。その説明として適當でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア、人類は今でこそ生き残ってはいるが、必ずしもこれから先の環境の変化に適應できるとは限らない。
- イ、人類が生き残ってきたのは決して強いからではなく、弱くても環境の変化に適應してきたからである。
- ウ、人類すべてが強いわけではなく、環境の変化に適應できないような弱い者は生き残ることができない。
- エ、人類は自らが強いと思ひ込んだまま何もしなければ、環境の変化に適應できずいずれ消えてしまう。

問五、この文章を意味段落に分けたものとして最も適當なものを次から選び、記号で答えなさい。

- |    |                            |   |                            |   |                            |   |                            |   |                            |   |                            |
|----|----------------------------|---|----------------------------|---|----------------------------|---|----------------------------|---|----------------------------|---|----------------------------|
| ア、 | <input type="checkbox"/> 1 | / | <input type="checkbox"/> 2 | / | <input type="checkbox"/> 3 | / | <input type="checkbox"/> 4 | / | <input type="checkbox"/> 5 | / | <input type="checkbox"/> 6 |
| イ、 | <input type="checkbox"/> 1 | / | <input type="checkbox"/> 2 | / | <input type="checkbox"/> 3 | / | <input type="checkbox"/> 4 | / | <input type="checkbox"/> 5 | / | <input type="checkbox"/> 6 |
| ウ、 | <input type="checkbox"/> 1 | / | <input type="checkbox"/> 2 | / | <input type="checkbox"/> 3 | / | <input type="checkbox"/> 4 | / | <input type="checkbox"/> 5 | / | <input type="checkbox"/> 6 |
| エ、 | <input type="checkbox"/> 1 | / | <input type="checkbox"/> 2 | / | <input type="checkbox"/> 3 | / | <input type="checkbox"/> 4 | / | <input type="checkbox"/> 5 | / | <input type="checkbox"/> 6 |

